

品川 弥 午 江 著

「岩 木 山」

小 舘 衷 三

今まだ、単独に「岩木山」を書いた書はない。それを幾多の困難が予想されながら、品川氏が取りくんたのは

津軽っ子の情々漲りへ良い意味でのしともいえよう。

その内容をみると、地質学・考古学・気象学・歴史学・民俗学・宗敎学・動物学・植物学・芸術・産業・観光・登山等……どれ一つを取りあげても容易でないものを総合的にまとめあげたものである。しかも、協力者を得たとしても、一人をまとめあげたものであり、今後、こういう企画は簡単に立てられないであろう。

これをなしたけ得た理由は、著者が県内第一位の東奥日報社の重職にあつたことゆゑのがせないが、なんとしても、著者の岩木山に対する熱情と教養と求道心のしからしむることによるといえよう。

二

それでは内容に関して少しばかりふれてみよう。

(1) 写真が多く、カラー風景に添えて、岩木山を四方八方からとらえ、しかも季節的配慮がなされていて、津軽各地のんの岩木山に対する気持を盛つたようである。アイデアと思うし、古来からの名画・名筆を転写してなる機会を得たのもよろこばしい。

(2) 地質・考古学に関しては、弘前大学の専門家の成果を利用しただけであつて、普通人のレベルをはるかに越えたものがある。

(3) 動植物、気象、歴史一般に關しても一応まとまつてゐるし、観光・登山も面白く語られ、文学へ短歌・俳

司、詩、文章して三つある面を網羅し、民謡をはじめ、
お琴夜小枝歌まで取材し津整人に親しみ深いものにして
いる。

〔4〕 さて、この二つの問題がある。それは著者も

「岩木山を知るためには、地質ないしは考古に根ざ
した科学性が必要。それとともに人間の記録をいろ
どる民俗信仰を併行させて、はじめのまろぬのある
真実をつきとめることができよう。ところが、その
画翼になう記事は少ない。……しかし過去に出て
いるその二―三を除けば、いずれも伝説を基礎にし
てのみばかり。古記を訳し、あるいは敷衍すること
は、かつての諸家の共通点でもあったのだ」(62ペ
ージ)

こゝ、歎いているように、「民俗信仰」にページを多く割
いているにもかゝらず、他の部門にくらべるといさこ
か貧弱をまぬがれない。すなわち、岩木山及びこれと
りまく民俗信仰、伝説を数多く取材しているが、それは
取材の範囲を出ない。地質学・考古学のレベルに比すれば
は指定らなく感ずるのは私の又ではなく、座談会に於て
も、成田末五郎氏は、

「これで基礎が出来たから、今後肉付けをしなけれ
ばし

べ、森山泰太郎氏は

「多面的に岩木山の歴史を書いたものとしては有史

以来でしょうが、民俗的観点から言へば全体の体系
を考へるべきだと望む。新編民謡で内容が薄くなる
のミヤむをえないだろうが、この点僅しい気がする

」(24ページ)

と、さすが、民俗学者として勝れた指摘をしている。
民俗信仰の研究者の一人として私は身を切られる思い
がする。稗言すれば、津整の民俗信仰の研究が他の部門
のレベルにくらべて一段と劣るということである。もし、
勝ぐれを研究成果が出されておれば著者も進んでそれを
利用したであろう。

私もその裏の一端を覗く暇はない。それは津整家
歴史に對して、中央の光をあてて、体系的に組織化され
なければならぬ時期に求めている。この本があとで出て
来、和歌森太郎氏、森山泰太郎氏等による「津整の民俗
」(吉川私文館刊)はその勝ぐれを成果を世に問うてい
る。

参考までに述べるならば、岩木山信仰は、北陸の白山
信仰、あるいは出雲信仰に連なるなどの深さがいすれ書
き却えられ、古くからの岩木山信仰の解明がなされ、こ
れをとりまく諸神社の信仰もそれに結びつけられる日が
くるであらう。

最後に95ページの「今に生きる旧暦の持つ合理性」に
ついて一言。著者は「陰暦」、「旧暦」、「新暦」の区
別を知って書かれたと思うが、「旧暦の合理性」という

点は一般に誤解されやすい。「陰曆」の便利な点は、月の
みちかけで月を区別するのによい、が一年が三五五日で、
季節のズレがでる。それで十九年に七回の閏年を設けて
その年を十三ヶ月とし、一年を三八五日として季節のバ
ランスを取っている。その感点となるのは、新・旧を区
わす立春の現代の二月四日になっているのであって、彼
等も、八十八夜も、二百十日もすべて、このから数えてい
るので、農事はすべて、立春を基準にしている点では、
新・旧を区別してある。

旧曆の好悪、多少し弊を少くせざればと思ふが、

昭和七年、十二月、発行

東京出版社刊、頁4、26ページ

「新・旧」の誤解を正す、昭和七年、